

# 潮来市の誇れる文化

第140回

## 大生神社の樹叢を考えると

結論から述べると、「大生神社の森の樹種を維持し守りたい」ということです。

古い神社の特徴として、周辺の社には多様な植物が古くから細々と生き続けているものです。大生神社は鹿島神宮の元の宮との言い伝えがあるくらい古い歴史を持っており、意識しなくても植生は永く保存され続けてきたようです。例えば、センリョウの天然株らしきものが観察されたり、俗称一両(種名 アリドオシ)、十両(ヤブコウジ)、百両(カラタチバナ)、そしてマンリョウを見つけていることが出来、一両から万両まで揃っています。但し樹叢の奥深くに立ち入らなければ出会えませんが、民有地が複雑に入り込んでいますので、注意が必要です。

特にアリドオシは、正月の寄せ植え盆栽としてセンリョウ、マンリョウを加えて「千両、万両有りどおし」の語呂合わせで使われることもあり、盗掘が目立つようになってきて年々株数を減らしています。



特筆すべきは、写真にあるカゴノキです。樹皮の一部が剥がれ落ちるため、それを小鹿の斑点模様と見立てて「鹿子の木」と名付けられています。

南方系の木で茨城県にはここ以外では筑波山に天然株があるとされており、カゴノキは雌雄異株ですが、大生神社には一株しかありません。こんな古木になっても結実することが出来ず孤独に立っています。もしこの木が枯れてしまうと、この地域での絶滅を意味します。

これからは古代から伝わる貴重な樹叢を積極的に維持保存しなければならぬ時代になってきます。気候変動や人間による持ち込み、乱獲、盗掘などにより、外来種の侵入と在来種の減少が顕著に見られるようになってきました。手遅れにならないうちに手を打たなければ、この貴重な文化財とも言える植物資源は保存できないでしょう。

潮来市文化財保護審議会委員

久保 隆

# 潮来市の誇れる自然

第80回

## 水郷の魚たちー北浦の流入河川の魚類

霞ヶ浦・北浦・外浪逆浦の3湖に接する潮来では、古くから湖の恵みを活かした暮らしが営まれてきました。今日でも水道・農業・工業用水、水産業、釣りなどの水辺レジャーは、湖なしには成り立ちません。それらとも密接にかかわる水や栄養分、土砂などは、湖に流入する河川から供給されます。そして、河川は魚たちの生息場所でもあります。

切なこともわかりました。河川の貴重な魚たちを私たちの将来世代に残すには、湖とのつながりや河川内の環境を再生していくことが大切です。流入河川の再生が進めば、一部で失われた湖の恵みを取り戻していくことにもつながっていくかもしれません。

茨城大学地球・地域環境共創機構水圏環境フィールドステーション  
加納 光樹

では、どのような環境を守ればよいのでしょうか？統計解析によって明らかとなったのは、ワカサギやハゼ類など10種の遡上が堰によって妨げられている実態でした。複数の絶滅危惧種にとっては、湧き水や岸近くの植生が大



北浦の流入河川で生息が確認された魚類